

平成31年4月24日(水)

鉛筆

鉛筆を使うのが好きである。鉛筆を机に並べて、次々と取り換えながら文字を書くのが性に合っている。シャープペンシルはなじまない。もっとも今の生徒たちは、シャープペンというのだろうが。クルリクルリと回しながら器用にシャープペンを使っている。もっとも、その握り方が一人一人まちまちである。親指と人さび指と中指の3本の指で3点で支えているはずが、親指と中指で挟んでおり親指の第一関節を折らないで伸ばしたままでいる者や、ぐうちょきぱ一のぐうにして親指と人差し指で挟んでいる者など違和感が計り知れない持ち方なのである。

昔小学校1年生の時に鉛筆の持ち方だけで1時間練習させられたり、小学校の習字の練習には筆の持ち方を何度も注意されたり、書くという行為の前に非常に形にこだわった指導が重ねられた覚えがある。その時には苦痛でしかなかったものの今になってはとてもありがたいことだったと思うのである。

鉛筆の持ち方においては、正しい持ち方が一番疲れない持ち方であるので、何十枚もの英語のスペルや歴史の学習において書いて覚える学習で役に立ったことがしばしばであった。

もっとも、今の生徒が、わら半紙や広告の裏を使って書いて覚える学習をしているかというとても想像できないのが現状である。スマホでリスニングしながらスペルを見たり、タブレットにある情報をなぞらえていることは時に見かけることがあっても、何百回と書いて覚える光景はしばらく見ることはなくなった。

ノートそのものをどう記入していくかとか、東大生のノートの取り方は違うという本も読まれていることはわかっているが、ノートそのものもこれからはパワーポイントなどのソフトを使ってパソコンの中に形作るようになるのだろうか。

間違いなくその技術は生徒のほうがたけている。コンピュータツールに関しては指の動かし方などまねのできない動かし方でラインに言葉を刻み込んでいる光景は日常である。コミュニケーションのツールの変革とともに記憶のツールも変わっていくのだろうか、これからの学問の在り方が今までとは劇的に変わるということも考慮しなければならないのだろうか。

UNI鉛筆の1ダースをMONOの消しゴムとともに大切に使った記憶はとうに過去のものである。モンブランの万年筆を自分のカネで買った時の感動は忘れられない。そんな思いを生徒たちは今後どのように持つのだろうか。

